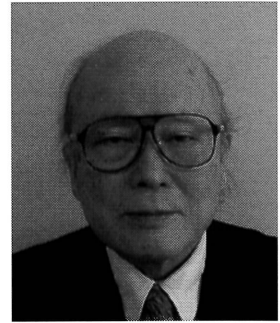


次の一手

戸田工業株式会社
顧問 堀石 七生

酸化鉄粉との出会いは1960年頃でしたから、酸化鉄粉の基礎研究と新製品開発に携わるようになって、かれこれ45年になります。振り返れば、'60年代は酸化鉄工業界が煙害と言う当時の製法に起因する大変苦難な問題を抱えていた時期で、企業は存亡の危機に直面していた時代でありました。その当時、戸田工業の経営者は「次の一手」として、時代に則した無公害製造技術を導入するために産学提携に取り組んでいました。

しかし、社会情勢は日米安保問題で揺れ、市場には不況の嵐が吹き荒れ「次の一手」の打ち手に困難を極めていました。

これを克服することができたのは、経営者の強固な意志と信頼関係で結ばれた大学の先生との出会いにありました。そして、鉄塩水溶液を用いる湿式合成技術による酸化鉄粉の無公害新製造法を導入して、この困難な問題を解決したのです。その当時はエレクトロニクス産業の勃興期でありましたので、この湿式合成技術は、エレクトロニクス技術の進展に呼応しながら塗料用、フェライト用、磁気記録用および磁性トナー用など、それまでの酸化鉄粉とは異なる新機能性酸化鉄粉を各種開発し、酸化鉄粉を進化させる有効な「次の一手」となりました。現在では、これら各種機能性酸化鉄粉はエレクトロニクス産業の米となって貢献しています。

当協会との出会いは1981年ごろと記憶していますので、かれこれ25年になります。BM News No.11に記載されている特集「協会のあゆみ」には、'81年10月に「プラスチック・ゴムマグネット懇話会」として産声を上げたことが記されていますので、協会発足当初からのご縁を戴いて来たこととなります。その当時、日本のフェライト工業界は大きな転換期を迎えていました。

1970年に京都国際会議場で武井武先生議長

の下に開催された「第一回国際フェライト会議・ICF-1」は、日本がフェライトの国際的なリーダーであることを象徴していました。しかし、'70年代後半には早くもフェライトの特性を遥かに越える高性能な新規磁性材料が誕生し、フェライト工業は国際競争の激化にさらされ、オイルショックが追い討ちを掛けるなど日本のフェライト工業界は苦境に立たされていました。

1980年には、特に焼結フェライト用仮焼品の価格は採算割れを起して国内のフェライト工業は一大危機に遭遇していました。この苦境を打開するために採った「次の一手」は「樹脂複合フェライト磁石」を開発して新しい市場を開拓することでした。しかし、フェライト仮焼粉を単に樹脂に練り込んで成型したのでは満足な磁石は得られないので、新規に樹脂複合磁石用フェライト粉を開発する必要がありました。そこで、プラスチック成型加工メーカーの協力を得ながら新型の「樹脂複合フェライト磁石」の開発研究を開始しました。当協会との出会いはこの頃でした。

当初は焼結フェライトを粉碎した粉をゴムに練り込んだゴム磁石が誕生しましたが、磁石性能の向上のためにはフェライト粉体の基本特性から検討する必要がありました。すなわち、微粒子化と磁気特性の高特性化、樹脂との混練時の分散性、成型加工時の粒子配向性などであり、焼結磁石とは異なる粒子形態から見直した粉体特性の改良が必要でした。一方の樹脂成型加工技術においても樹脂に添加するフィラーが質量共に大きく変化したことにより、バインダー樹脂の改善や金型および混練成型機を改良、コンパウンドの高密度化や成型加工法などに関する新規技術の開発が必要でした。このように「樹脂複合フェライト磁石」の開発には異業種に互る技術開発と統合化が必要でした。ここに当協会誕生の動機と必然性がありました。

当協会は、1981年に早くも(社)日本合成樹脂技術協会内に「プラスチック・ゴムマグネット懇話会」を設立し、1984年には同協会から独立して「プラスチック・ゴムマグネット工業会」に、1988年には「日本ボンデッドマグネット工業協会」に名称を変更する度に組織を充実し事業を拡大して、今日の「日本ボンド磁石工業協会」へと大きな発展を遂げて来たのでした。その歴史の節々には、鈴木和雄氏や原田英樹氏他歴代の会長各位がその時々トレンドを読み時代に則した「次の一手」を打って来られた様子が前記の「協会のあゆみ」から読み取ることができます。

そして、現原田会長はBM NewsNo.34のBM素心で、さらに当協会を発展させるための「次の一手」としてタスク3点を掲げて準備をされています。「ボンド磁石協会」から「ボンド磁材協会」への改名はその具体的な意思表示であり、この「次の一手」には多くの会員から賞賛と賛同が得られるに違いないと確信しています。

すなわち、如何に困難な状況にあっても、それを打開する強い意志と確かな「次の一手」を持てれば、難問を打破して前進し発展することができるからです。

日本が遭遇している現在の厳しい経済環境においてこそ、ボンド磁材で世界のリーダーとなり、再び日が昇る日本にするための「次の一手」が強く求められています。

ボンド磁材工業界の要である当協会の活動に期待が寄せられる所以であります。

昨年11月9日、フェライトに携わる者にとって最高の栄誉である加藤記念賞を受賞しました。この受賞は、これまでご指導ご支援を賜った諸先輩の方々からの賜物であることを思い有難く感謝に堪えません。

授賞式当日にはご多忙な多田専務理事がわざわざご参加下さいました。大変有難くも嬉しく思いました。そしてその際に、多田専務からはお祝辞と共に、この巻頭言の執筆の依頼を受けました。大変光栄に思いお引き受けした時、多田専務は常に「次の一手」を考えて居られる方であることを知り、当協会がこれからも益々発展するに違いないことを確信した次第であります。